

◎ 文学部創設100周年を迎え、記念シンポジウムを実施

歴史を礎に、次の100年に向け、さらなる進化を



▲「100周年記念シンポジウム」会場の様子

関西大学文学部は2024年、創設100周年を迎えた。文学部は駐日フランス大使で詩人・劇作家として知られるポール・クロデル氏の勧めを受け、1924年に専門部へ文学部が設置されて以来、複数学科を擁する時代を経て、2004年に1学科多専修となった。これまでに送り出した卒業生は約5万4,000人。現在は毎年約800人の新入生を迎えている。

創設100周年を迎えるにあたり、5月25日、千里山キャンパスにて「100周年記念シンポジウム」が開催された。当日は、関西



竹内洋名誉教授による基調講演

▲関西大学名誉教授によるパネルディスカッション

大学名誉教授の竹内洋氏による基調講演「葦の髄からの『文学部論』」をはじめ、名誉教授4人による話題提供やパネルディスカッションも行われ、主にこの30年を振り返りながら、未来への展望を描く機会となった。

また、4月7日～5月31日まで、関西大学博物館にて、文学部創設100周年と博物館開設30周年を記念する連携企画展「花開く



大阪の文化」も開催。大阪にかかわる作品・資料を中心とする4テーマから、文学部100年の歩み、博物館30年の探究の成果を展示した。

◎ 2024年度入学式を挙行。新入生歓迎行事・歓迎の集いも開催

桜が咲き始めたキャンパスに、新入生の笑顔あふれる

2024年度関西大学入学式が4月1日、大学院入学式が2日、千里山キャンパスにおいて挙行され、6,832人の学部生と845人の大学院生が新たな門出を迎えた。

また、3月31日には、今春から一人暮らしを始める新入生を対象に、学生同士の交流を促す「新入生歓迎の集い2024」も開催された。本イベントは、初めて一人暮らしをする在学生の父母から不安の声が寄せられたことを受け、大学と教育後援会・校友会・関大生協などが協力し、2018年度より行っている。当日は、ファシリテーターとして上級生や職員も参加し、約800人の新入生同士のスムーズな交流をサポート。応援団の演奏をはじめ、本学校友でFM802DJの樋口大喜さん、大阪・関西万博公式キャラクターのミャクミャクと関大万博部による新入生歓迎セッションなども行われ、盛会のうちに終わった。

さらに、2日～4日には、オリエンテーション実行委員会運営のもと、各クラブ・サークルがブースを出展し、熱心に新入生を勧誘。各クラブのパフォーマンスも行われ、キャンパスはいつも以上に活気で満ちあふれた。



新入生歓迎の集い2024

新入生歓迎オリエンテーション

◎ 2025大阪・関西万博に向け、多様な活動が活発化

関西大学リボーンチャレンジ選定企業9社の大阪ヘルスケアパビリオン出展が決定 開幕まで1年を切り学生たちの機運も高まる



本学リボーンチャレンジの展示イメージ

関西大学リボーンチャレンジ 出展企業一覧



本学リボーンチャレンジから出展する大阪冶金興業株式会社の寺内代表取締役が、吉村知事より出展証を受領。(左から)立野中小・SU出展企画推進委員長、寺内氏、吉村大阪府知事、横山大阪市長▶

3月25日、日本国際博覧会大阪パビリオン推進委員会より大阪ヘルスケアパビリオン「展示・出展ゾーン」への出展企業377社が公表され、関西大学リボーンチャレンジを通じて選定した企業9社の出展が決定した。

リボーンチャレンジとは、中小・スタートアップ出展企画推進委員会が主導する、大阪の中小企業・スタートアップの支援事業企画のこと。大阪ヘルスケアパビリオン内に設けられる展示・出展ゾーンにおいて、中小企業・スタートアップの優れた技術や魅力、成果を発信する。認定件数は全26件で、本学は教育機関として唯一選定されている。

また、4月20日に梅田キャンパスで行われた、大阪・関西万博公式ボランティアの学内説明会では、併設高校の生徒らを含む総勢600人超が参加。翌日の関大万博部新入生歓迎イベントでは、現役部員たちが万博部発足の経緯や活動内容、そして万博への熱い想いを丁寧に語り、ゲームも織り交ぜながら楽しく交流した。

5月19日には関大万博部の入部説明会が開催され、正式に150人が新メンバーとして加わった。関大万博部誕生からちょうど1年が経過し、未来社会クリエーターたちの士気は大きな高まりをみせている。



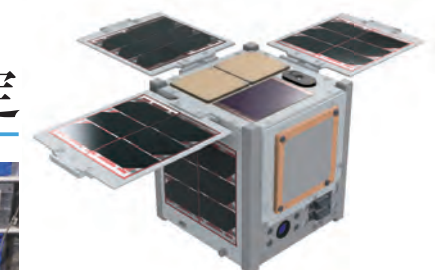
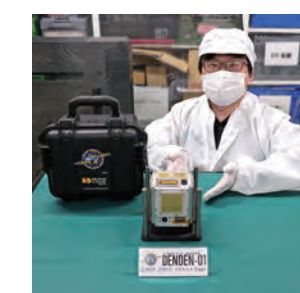
(写真・上) ボランティア説明会にて(写真・下) 関大万博部新入生歓迎イベントで新入生と交流

◎ 関西大学初の人工衛星を開発、JAXAに引き渡し完了

今秋、国際宇宙ステーションから超小型衛星「DENDEN-01」を放出予定

関西大学化学生命工学部の山縣雅紀准教授が代表(プロジェクトマネージャー)を務め、福井大学、名城大学、株式会社アークエッジ・スペースと共同開発した関西大学初の超小型人工衛星キューブサット「DENDEN-01」が完成し、6月4日、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)筑波宇宙センターへの引き渡しを完了した。

「DENDEN-01」は、JAXAおよびNPO法人宇宙工学コンソーシアム(UNISEC)により公募された「学術利用及び人材育成を目的とした『きぼう』からの超小型衛星放出機会の提供プログラム(J-CUBE)」に選ばれた衛星であり、さまざまな革新的エネルギー技術を実証する。特に温度変化の激しい宇宙空間でも電源の温度を保つ、固-固相転移型潜熱蓄熱材(SSPCM)を活用した電源温度安定化デバイスを搭載しているのが特徴。新型宇宙用太陽電池や高精度電力状態推定プログラムの実証も行い、高品質で安定した電力供給技術を実現し、さらに、高速通信や撮影画像データの人工衛星上での解析などの高負荷ミッションにも挑戦する。



▲「DENDEN-01」外観図 (太陽電池パドル展開時)

◀山縣雅紀准教授と「DENDEN-01」

今後、JAXAにて輸送準備を整え、今秋には国際宇宙ステーション(ISS)に向けて打ち上げられた後に、高度380～420km程度の地球周回軌道に投入される予定だ。

本衛星プロジェクトで得られる成果は、今後の宇宙産業を担う高機能な超小型衛星の開発を加速させ、日本の宇宙産業のさらなる発展に役立つことが期待される。